

覚一本『平家物語』における文覚像

——その呼称から——

はじめに

覚一本『平家物語』において文覚が登場する箇所は、巻第五「文覚荒行」「勸進帳」「文覚被流」「福原院宣」巻第十二「紺搔沙汰」「六代」「泊瀬六代」「六代被斬」である^①。

物語全体からすると、その説話の分量は決して多くはない。しかし、文覚は、『平家物語』において重要な人物と考えるべきである。何故ならば、巻第五で文覚が後白河法皇から院宣を受け取ったことをきっかけに頼朝の挙兵を描き、巻第十二では、頼朝から得た信頼を武器に斬首直前の六代を請い受けるというように、物語の転換点で登場しているからである。これら文覚が登場する説話群は、傍系説話ではなく、『平家物語』の構想に関わる重要な位置を占める説話といえるのではなからうか。

城 阪 早 紀

このことについては、既にいくつかの研究成果がある。例えば、山田昭全氏は、『平家物語』の構想と文覚の関連について述べておられ、五味文彦氏も、文覚の存在によって「平氏と源氏と朝家」が「有機的」に結びついていると指摘されている^{②③}。これらの指摘は重要ではあるが、その論証は十分とは言えず、本文に即した調査が必ずやだと私は考える。

また、延慶本において、生形貴重氏は文覚が「頼朝に挙兵を教唆するとき」に語る言葉が物語の構想に関わっていると指摘されており^④、さらに中村理絵氏は「京から鎌倉へ首を持ち帰る文覚が発した言葉」が「義経との骨肉の争い」を予言するものであり、物語の構想に関わると指摘されている^⑤。これらは延慶本では文覚の言葉が物語の構想に関わるという指摘である。一方の語り本系諸本の完成形ともいえる覚一本では、文覚の何が物語の構造に関わるのか、検討

する必要があるだろう。

さて、文覚の登場する説話を追っていくと、ある違和感を覚える。それは、巻第五では「文覚」と呼ばれる文覚が、六代救済に関わる時「聖」と呼ばれるという呼称の変化である。これに言及しているのは岩瀬博氏のみであるが、呼称や敬語の「待遇表現」の違いを指摘するのにとどまり、踏み込んだ考察は行っておられない。

では、どうしてこのような呼称の変化がみられるのだろうか。一人の人物でありながら、異なる呼称で語られる文覚は、一貫性が無いのだろうか。そして、覚一本の作者は（あるいは編者は）文覚をどのように描こうとしたのだろうか。これらの問いに答えるために、延慶本の用例と比較しつつ文覚の呼称の用例を具体的に検証することを通して、客観性のある論証を行ってきたい。

一、『平家物語』における呼称研究

覚一本及び他の諸本においても文覚呼称の研究は今までされていない。『平家物語』の人物の呼称研究は、延慶本を対象とした早川厚一氏の論考^⑧と武久堅氏の二つの論考^⑨のみである。

私は、『平家物語』の人物の呼称を論ずる上で呼称の一貫性とばらつきをどのようにとらえるかが、重要な点になると考える。よって、この点に着目して先行研究を確認していく。

覚一本『平家物語』における文覚像

早川氏は延慶本巻十二末「廿九 右大将頼朝果報目出事」における頼朝の称賛的な見方が部分的なものか全体にわたって見られる特徴であるかを明らかにするため、呼称の用例を検討された。

その方法は、およそ七十通りの呼称のうち使用の多い八種の呼称について、長門本と比較するというものである。検討にあたって「会話文においては編者よりも話し手の立場が出てしまふ」として、地の文を重視しておられる。地の文の「呼称一つ一つに、頼朝に対する『延慶本』の編者の見方を知ることができ」とする早川氏の立場は、呼称を考える上で尊重すべきものである。

早川氏は、「頼朝の官位の昇進に従って」呼称が変化すること、それらの「呼称で語られる頼朝譚は、色々なところで、その不整合面を露呈する」ことを明らかにされた。そして、「頼朝への賞賛的な姿勢を、必ずしも『延慶本』本来のもの」とは考えず、「徐々に構想されてきたものであって、その間に幾多の段階があった」とし、「頼朝の様々な呼称を地の文に持った幾つかの話が書き込まれていたり、増補されたりした。その結果、『延慶本』は非常に多面的に頼朝像を描くことに成功している」。しかし、「一方では、その不整合な面を露呈することにもなった」と述べておられる。

では、『平家物語』の構想にも深く関わっている文覚は、どのように描かれているのであろうか。呼称の違いが、人物の「不整合

面」を示すという早川氏の結論に収まりきるのであろうか。

また、武久氏も延慶本『平家物語』の高倉宮と宗盛の呼称を検討された。「高倉宮物語」の構造」において「高倉宮物語」に焦点を絞って、延慶本本文を中心に平家物語巻四の邇態を究明し、「高倉宮物語」に一貫する登場人物の人物配置を解明し、邇態の構造把握ののちに、それらの成長過程において次第に増補された高倉宮批判の説話と、頼政説話に視界を拡大して考察」された。

呼称という観点に着目したとき、重要な点は以下の二点だろう。

一点目は、高倉宮の呼称が延慶本のみならず語り本系諸本においても「高倉宮」「宮」で一貫されていることから、「すべての平家物語が治承四年五月の動乱を」「宮」の物語としてその統一的形象を定着せしめていることを確認」された点である。二点目は、「物語が現在進行形の場面から一歩はずれて、〈独立的伝承や説話物語〉を編み込んだり、〈作者が新規にまとめ上げた著述部〉や〈評言〉に移行するとき呼称に変化のあらわれること」を明らかにし、「事件の経過を現在進行形で伝える宮の動静を追う物語」と、「そこに付加された宮にまつわる独立的伝承や著述部や評言」によって「高倉宮の物語」が構成されていることを明らかにされた点である。

また、武久氏は「大臣殿物語」の主人公—宗盛伝承の様式と平家物語の構想」の中で、宗盛の呼称についても、「一門都落物語」

において「大臣殿」の呼称で語り通されることから、「ほぼ一貫する視座の想定が可能」であり、「大きな振り幅のない統一性のある宗盛像」を結ぶことが出来るとされた。さらに、「源三位入道謀叛之由来事」では、「宗盛」と呼び捨てられること、平曲では「宗盛卿」と敬称扱いにされていることから、「延慶本の呼び捨て」から、「叙述の座を一貫して伊豆守と呼び続けた仲綱に引きつける」ことが可能であるとされた。そして「宗盛を嘲弄する二つの伝奇譚が敗者源三位頼政一統の周辺から発生し、成長を遂げて、その一つはやがて頼朝拳兵譚に不可欠の拳兵由来譚となって定着」したと述べておられる。

官位の昇進に従って呼称が変化するという点については、早川氏と武久氏ともに認めておられるが、文覚にはそのような傾向は認められない。よって、文覚の呼称を検討するには個別の分析が必要であろう。続く本論では、その文覚に対する「平家」作者の見方を知ることのできる覚一本『平家物語』の「地の文」において、どのように文覚が呼ばれているのか確認する。その上で、呼称と人物像の関係と物語の統一性について考察を加えていきたい。

二、人物の呼称についての定義

論証の前に、呼称の定義について考えねばならない。ここでの呼

称とは「物語中で文覚という一人物を指示している名詞」を全て取り上げることとする。ただし、他の人物の呼称の一部や場所を示す語の一部と判断した用例は除いた。

これらの呼称を、「地の文」「会話文」「文書」に分けた。「会話文」の呼称は「他称」と「自称」に分けられる。例えば「他称」には、

「此法師、奇怪なり」とて、やがて獄定せられけり。

(巻第五「文覚被流」三三八頁)

がある。文覚が礼儀もわきまえず院の御所へ勸進帳を持って押しかけた時の、後白河法皇の言葉である。ここでの文覚は、後白河法皇に「此法師」と呼ばれている。早川氏が注目されているように、「他称」からは、文覚と文覚を呼ぶ人物との身分差や立場の差を認めることができそうである。「他称」は心内語も含め、覚一本に一七例、延慶本に二三例確認できた。「自称」には、次のような例がある。

「いかにこれほどの大願おこいたる聖が乗つたる舟をば、あやまたうどはするぞ。ただいま天の責かうむらんずる竜神どもかな」とぞ申しける。

(巻第五「文覚被流」三三八頁)

文覚が伊豆に流される途中に風に遭遇した場面で、竜神にこのように語りかけている。ここでは自らを「これほどの大願をおこいたる

聖」と仰々しく称している。「自称」からは、その場その場における文覚の自己認識が窺えるといえるだろう。このような「自称」は覚一本に一六例、延慶本に三二例確認できた。また、「文書」の呼称とは、勸進帳や院宣の中にみられる呼称のことである。このような「文書」中の呼称は覚一本には五例、延慶本に七例確認できた。

本稿では、「会話文」中や「文書」中の用例を除いたものを「地の文」の呼称として定義し、考察対象とする。これを便宜的に「一義的呼称」と「二義的呼称」に分けた。「一義的呼称」を具体的に挙げると、

文覚声をいからかして、「さて、明王はいづくにましますぞ」。

(巻第五「文覚荒行」三七九頁)

聖六波羅にゆきむかつて、事の子細を問ひ給ふ。

(巻第十二「六代」四六八頁)

のようなものである。用例に「一重棒線」を付すことで示す。一方の「二義的呼称」とは、

文覚は天性不敵第一のあらひじりなり。

(巻第五「勸進帳」三八一頁)

文学ハ昔ヨリサルイカメシキ者ニテ、身ノホドアラハシタリシ者ゾカシ。

(第二末「文学伊豆国へ被配流事」四八二頁)

の二重傍線部「 」で示した呼称で、「天性不敵第一の」とか

「身ノホドアラハシタリシ」という語が付随している。これらは、「あらひじり」や「者」といった文覚を指示している名詞が、人物の特徴をより鮮明に描くための修飾語を伴っている比喩的な呼称と考える。そのために「一義的呼称」とは區別して扱う。ただし、修飾語を伴っていても、人物名や地名の場合は「二義的呼称」の用例として扱うこととした。これを表にまとめ、資料として末尾に付した。

三、覚一本の呼称用例の検討

覚一本の文覚呼称は全九二例ある。そのうち、「地の文」の呼称は五五例である。一義的呼称は五二例あり、「文覚」「聖」「高雄の文覚上人」「高雄の聖」「文覚房」「渡辺の遠藤左近将監茂遠が子」「遠藤武者盛遠」の七通りの呼称がみられた。二義的呼称は「やいはの験者」「天性不敵第一のあらひじり」「もとよりおそろしき聖」の三例であった。覚一本の呼称を章段ごとに追っていくと、次のようなことが認められる。

一義的呼称について

- ① 巻第五の冒頭と巻第十二の冒頭どちらも「高雄の文覚上人」という呼称を用いている。

- ② 大枠として、巻第五では「文覚」と呼ばれ、巻第十二では

「聖」と呼ばれる。しかし、巻第十二の最後の隠岐国に流罪になる場面では、再び呼称が「文覚」に戻る。

- ③ 巻第五の文覚登場最後の章段「福原院宣」・巻第十二の文覚登場最初の章段「紺搔沙汰」では、「文覚」と「聖」の両方の呼称が用いられている。

二義的呼称

- ④ 二義的呼称は、物語全体の人物造型に関わる。

以下、これらの事例について、個々に検討を加えていく。

①の事例

- 1 年ごろもあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀反をばおこされけるぞといふに高雄の文覚上人の申しすめられたりけるとかや。
(巻第五「文覚荒行」三七六頁)

- 2 同八月廿二日、鎌倉の源二位頼朝卿の父、故左馬頭義朝のうるはしきかうべとて、高雄の文覚上人頸にかけ、鎌田兵衛が頸をば弟子が頸にかけさせて、鎌倉へぞ下られける。
(巻第十二「紺搔之沙汰」四四二頁)

「高雄の文覚上人」という呼称はこの二例のみである。説話の冒頭部において文覚が「上人」と称されている。では覚一本において「上人」はどのような意味を持っているのだろうか。覚一本において「上人」と称される人物は、文覚・法然・智覚・阿証房の四人で

ある。法然は重衡に十戒を授ける人物、智覚は（実際は滝口入道のもとで出家したが）維盛を出家させる人物として想定されていた人物、阿証房は建礼門院の御戒の師である。このように「上人」とは戒を授け、出家へと導く人物である。覚一本の文覚は、戒を授けてはいない。しかし、頼朝に義朝の首を託し供養させ、さらに六代を救出し小松家の菩提を弔わせる、といった文覚の果たす役割は、「上人」と言つて遜色ないのである。巻第五と巻第十二の文覚にまつわる章段を「高雄の文覚上人」と同一の呼称で語り始めることから、一貫した人物像を描こうとした意図が汲み取れる。

②の事例

3 しかるに文覚、滝つばにおりひたり、頸きはつかつて、慈悲の呪をみてけるが、二三日こそありけれ、四五日にもなりければこらへずして、文覚うきあがりけり。

（巻第五「文覚荒行」三七七頁）

4 彼文覚と申すは、もとは渡辺の遠藤左近将監茂遠が子、遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆なり。

（巻第五「文覚荒行」三七六頁）

5 聖六波羅にゆきむかつて、事の子細を問ひ給ふ。

（巻第十二「六代」四六八頁）

6 さる程に文覚房もつと出できたり、若公こひうけたりとて、気

色誠にゆゆしげなり。

（巻第十二「泊瀬六代」四七六頁）

7 このきみはあまりに穂杖の玉をあいせさせ給へば、文覚かやうに悪口申しけるなり。

（巻第十二「六代被斬」四九六頁）

巻第五の「文覚荒行」「勸進帳」「文覚被流」では、3のように一貫して「文覚」と呼ばれる。例外となるのは4のみで、文覚と名乗る前の在俗の名を挙げた用例である。巻第十二の「六代」「泊瀬六代」といった六代救済の場面では、5のように一貫して「聖」と呼ばれ、後鳥羽天皇に謀反を起こす場面では7のように呼称が「文覚」に戻る。例外となるのは6の一例のみで、六代を請い受けた文覚のことを「文覚房」と称している。「房」とは、元々僧の住まい指す語であり、それが名前に続いて人物の呼称となったものである。覚一本においては、「額打論」に登場する「観音房」「勢至房」のような武装した僧侶に用いる例もみられるが、この「文学房」の場合には本来の意味を意識した例で、平氏嫡流の六代を請い受けるに相応しい高雄に住まいを持つ人物像を強調していると考えられる。

「文覚」から「聖」に変化し、再び「文覚」に戻ることで、人物の一貫性が強まっていると考えられるが、この呼称の変化にはどのような理由があるのだろうか。③の事例をもとに考えてみる。

③の事例

8 兵衛佐殿へ常は参つて、昔今の物語ども申してなぐさむ程に、

或時文覚申しけるは、

(巻第五「福原院宣」三八九頁)

9 文覚かさねて申しけるは、「天のあたふるをとらざれば、かへつて其とがをうく。」

(巻第五「福原院宣」三九〇頁)

10 聖|これをくびにかけ、又三日といふに伊豆国へくだりつく。

(巻第五「福原院宣」三九二頁)

11 うるはしきかうべとて、高雄の文覚上人頸にかけ、

(再掲)

12 東山円覚寺といふ所に、ふかうをさめておきたりけるを、文覚聞き出して、かの紺かきの男共に相具して下りけるとかや。

(巻第十二「紺搔之沙汰」四四三頁)

13 聖|をば大床にたて、我身は庭に立ッて、父のかうべをうけとり給ふぞ哀れなる。

(巻第十二「紺搔之沙汰」四四三頁)

これが、巻第五「福原院宣」と巻第十二「紺搔沙汰」の全六例である。「文覚」と「聖」の両方の呼称が使われていることが注目される。10は、後白河法皇の院宣を持ち頼朝のいる伊豆へと向かう場面である。頼朝に謀反を勧めた文覚であったが、「抑頼朝勸勤をゆりずしては、争でか謀反をばおこすべき」と断られる。そこで文覚は、自身も流人でありながら新都福原・伊豆間を往復し院宣を首にかけて駆けつける。ここで初めて「聖」と呼ばれる。「平氏の一類を誅して、朝家の怨敵をしりぞけよ。」と告げる院宣は、一流罪人であった頼朝の立場を一転させるものであり、物語の転換点にもあ

たる場面である。

13は、義朝の首を頼朝に託す場面である。謀反を勧めたときに見せた「白いぬのにつつんだる髑髏」が偽物であったことを明かし、紺搔の男が東山の円覚寺に納めておいた「かうべ」を鎌倉へと運ぶ。ここで再び「聖」と呼ばれる。この「かうべ」を受け取った頼朝は、父の菩提を弔うために勝長寿院を建立する。これを受けて、朝廷も故左馬頭義朝の墓へ内大臣正二位を贈る。頼朝は、「祖先の霊を祭る役目の家の総領¹⁰」となるのである。

10と13の場面において、文覚のことを「聖」と呼び、「文覚」から「聖」への呼称の変化を自然かつ段階的なものにしていく。そして、『平家物語』の構想上からみても重要なこの場面において、「聖」と呼ぶことにより、文覚の二つの行動に、頼朝と信頼関係を築き六代救済者としての資格を得たことを示すという意味を込めたと解釈できる。覚一本は、文覚の行動を重視しているといえるだろう。「聖」から「文覚」へと呼称が戻るはその逆で、出家を惜しんだために六代が文覚のもとを去り、拠所であった頼朝の亡き後に後鳥羽天皇に対して謀反を起こしたためと解釈できる。

④の事例

14 都へのほりたりければ、凡そとぶ鳥も祈りおとす程のやいばの
験者¹¹とぞきこえし。

(巻第五「文覚荒行」三八〇頁)

15 文覚は天性不敵第一のあらひじりなり。

(巻第五「勸進帳」三八一頁)

16 ここに文覚もとよりおそろしき聖にて、いろふまじき事にいろひけり。

(巻第十二「六代被斬」四九五頁)

14は、那智の滝行によって不動明王の加護を得た後、諸国の修験道の霊地を巡り都へ上った文覚を「やいばの験者」と称している。

従来の注釈は「やいば(刀の刃)のように効験の鋭い修験者」で一致している。例えば『平家物語全注釈』^①で指摘があるように、「修験道の自力の修行を積むことによって不可思議な神通力を得た僧」として描かれている。自らも流人でありながら頼朝に院宣を届け、絶対絶命の六代を請い受けるというように、不可能をも可能に変えることのできる人物として描くためには、「やいばの験者」と称される必要があるのである。

15は、高雄の神護寺修造のための勸進帳を片手に法住寺殿へ押し入った文覚を「天性不敵第一のあらひじり」と称している。天皇が相手でも恐れることなく、目的を遂げるために手段を選ばない、敵なしの人物として描いている。16は頼朝が亡くなった後、後鳥羽天皇へ謀反を起こそうとした文覚を「もとよりおそろしき聖」と称している。ここでも天皇に刃向かう存在を「おそろしき」と表現しており、後白河法皇に「この世の中は、只今乱れ、君も臣もみなほろ

びうせんずる物を」と言い捨てた「天性不敵第一のあらひじり」としての文覚像と見事に重なる。

このように、二義的呼称はその場面だけにとどまらず、物語全体の文覚像の造型を決定付けるものである。これにより、一義的呼称が「文覚」から「聖」そして再び「文覚」へと変遷しても、一貫した文覚像を描くことが出来ているのではないだろうか。

四、延慶本の文覚呼称

延慶本の文覚呼称は全二〇五例ある。そのうち、「地の文」の呼称は一四三例ある。一義的呼称は「文学(文覚)」「聖(聖リ)」など一八通りの呼称がみられた。二義的呼称は一一例であった。延慶本の呼称を覚一本の呼称と比較すると、次のようなことが認められる。

- ① 第二末では「文覚」と呼ばれ、第六末の六代救済の場面において「聖」と呼ばれるが、隠岐国に流罪になる場面では再び呼称が「文覚」に戻るという大枠は、覚一本と共通している。
- ② 複数回用例のある「文覚上人」「文覚房」を確認すると、その文覚像に共通点がみられず、ゆれ幅がある。

③ 二義的呼称に、その場その場に適した呼称が豊富にみられる。以下、これらの事例について、個々に検討していくことにする。

①の事例

17 此ノ文学ガ勸進帳ノ音声ニ、調子モソレ、拍子モ違テ、人々皆興サメニケレバ、

(第二末「文学院ノ御所ニテ事ニ合事」四七四頁)

18 聖、「少キ人ヲ取ケム武士ヲバ誰トカ云シ」ト問ケレバ、「北条四郎トコソ申候ツレ」ト(第六末「六代御前被召取事」四八七頁)

19 文学「及杖冠者」トゾ申ケル。

(第六末「文学被流罪事付文学死去事隠岐事」五四七頁)

17のように、第二末の修行を積み、勸進帳を持って法住寺殿へ押しかけ、伊豆に流されるまで、「文学」と呼ばれる。ただし、覚一本では語られない「文学ガ道念ノ由緒事」では「盛遠」という呼称に加え「男」「遠藤」などと呼ばれ、呼称の乱れが顕著である。

18のように、六代を救済するとき文覚は「聖」と呼ばれる。ただし、延慶本で「聖」と呼ばれるのは、六代の母や乳母の女房・斉藤五・斉藤六といった六代側の人物と関わる場面に限られており、頼朝や北条四郎と会話するときの文覚は「文学」と呼ばれるという覚一本にはみられない使い分けが確認された。

そして、19のように、後鳥羽天皇に謀反を起こす場面では覚一本と同様に「文学」と呼ばれ、「聖」と呼ばれることはない。

②の事例

25 義朝ガ首ベヲ蒔絵ノ箱ニ入テ、錦ノ袋ニ囊テ、文覚上人ノ頸ニ懸タリ。(第四末「文覚ヲ便ニテ義朝ノ首取寄事」一四四頁)

26 サテ上人鎌倉へ下着ニケレバ、兵衛佐冠帯ヲタゞシクシテ、庭上ニヨリ向ヒ、只今頭殿ノ入ラセ給ト思准へ給テ、

(第四末「文覚ヲ便ニテ義朝ノ首取寄事」一四四頁)

27 文学上人ハ元ヨリ怖キ心シタル者ニテ、「当今ハ御遊ニノミ御心ヲ

(第六末「文学被流罪事付文学死去事隠岐事」五四六頁)

28 十八ノ年、道心ヲ発テ本鳥ヲ切テ、文学房トテ高野粉河山々寺々迷アリキケルガ、兵衛佐ニ相奉テ、勸奉リタリケルトゾ聞へシ。

(第二末「兵衛佐頼朝発謀叛一ヲ由来事」四四九頁)

29 其後十一年ト申ケルニ、トガノ尾ノ明恵上人ノ許ニ文学房出来ル。

(第六末「文学被流罪事付文学死去事隠岐事」五四七頁)

25と26は、義朝の「首べ」を首にかけて鎌倉へ下る場面において「上人」と呼ばれる。しかし、27では後鳥羽天皇が相手であつても躊躇することなく謀反を起こす「元ヨリ怖キ心シタル者」である文覚を「文学上人」と呼んでいる。

28は、十八才に道心を起こしてから修行を積んでいる文覚のことを「文学房」と称している。29は、覚一本には語られない話であるが、明恵のもとに姿を見せた文覚の亡霊を「文学房」と称している。

覚一本では、義朝と小松家の菩提を弔わせる「文覚上人」・六代

を請い受けるにふさわしい寺に住む「文覚房」というように、呼称と人物像との関係が読み取れた。しかし、延慶本内では、同じ呼称で語られる文覚像にはゆれがある。「文学」と「文覚」と「聖」と「聖り」というように、しばしば表記の乱れも窺えることから、物語全体の呼称一つ一つにまで気を配り統一しようとする意図は汲み取れないといえるだろう。

③の事例

30 見レバ、腹巻ニ太刀脇ニハサミタル大童一人、広挺ヘツトノボリ、
(第二末「文学ガ道念ノ由緒事」四六三頁)

31 十八才ヨリ出家シテ、一十三年之間ハ、持齋持律ノ行者也。
(第二末「文学ガ道念ノ由緒事」四六七頁)

32 御前ノ無骨トハ思ワデ、人ノウタテキニテコソアレト思ケル故
ニ、天性ノ不当ノ者ノ、而モ物狂キニテ有ケレバ
(第二末「文学院ノ御所ニテ事ニ合事」四七一頁)

33 文学ハ昔ヨリサルイカメシキ者ニテ、身ノホドアラハシタリシ
者ゾカシ。
(第二末「文学伊豆国へ被配流事」四八二頁)

ここに挙げたように、文覚の様々な姿が二義的呼称によって表現されている。法住寺殿に乗り込む時には、30のように大柄な体つきを印象付けている。鳥羽の女の供養のために仏道修行している様子は31のようにその熱心さを表現する。相手が天皇であっても、憚る

ことのない態度は323のように大胆不敵であるとする。

このように二義的呼称をその場の文学像に応じて用いることによって、その場面ごとの文覚像をより鮮明に描くことに成功している。

おわりに

ここまで、延慶本を対象とした早川厚一氏の頼朝呼称研究と、武久堅氏の高倉宮・宗盛呼称研究にならない、延慶本と比較するという方法をとりながら覚一本の文覚呼称について検討してきた。

その結果として、覚一本・延慶本ともに、一義的呼称が「文覚」から「聖」そして「文覚」へと変遷することが確認できた。「聖」の定義は諸説あるが、その特性として、「寺院にはいらず、私的に修行している隠遁僧。また修験集団などに属し、修行して験力を得た僧。行者。験者」や、「勧進聖」という語から勧進活動をする^⑬ことが挙げられる。

しかし、荒行に励む文覚も、勧進帳を読み上げる文覚も「聖」と称されることなく、覚一本・延慶本ともに六代救済に関わるとき「聖」と呼ばれた。このことから考えると、文覚を「聖」と称する共通の伝承が存在していたことを想定するのが自然であろう。呼称の異なる本文を組み込むと、一人の人物の呼称が急に変化し、人物の一貫性と物語の統一感が失われるような印象を受ける。

延慶本は、物語全体として呼称を統一する意思を汲み取ることとは出来ないが、むしろ積極的に豊富な呼称を用いることによつて、その場その場の文覚像の輪郭を際立たせているといえるだろう。

一方の覚一本では、物語としての一貫性を高めるために巻第五と巻第十二の冒頭において文覚の呼称を「高雄の文覚上人」と統一した。そして「文覚」が、頼朝に院宣と義朝の首を渡すという物語の転換部に当たる場面を用いて、六代救済者「聖」の資格を獲得する様を描いた。このように、呼称の変化が人物の「不整合面」を示すとは言えず、むしろ異なる呼称を用いても人物を統一的に描こうとした姿勢を読み取ることが出来た。さらに、二義的呼称を効果的に用いることにより、物語の牽引力となる人物を確立させているところに覚一本の特徴がみられる。

注

- ① 市古貞次校注・訳『新編日本古典文学全集平家物語』・二 小学館、一九九四年。以下、覚一本の引用は全て本書による。
- ② 山田昭全『平家物語』「文覚と平家物語」角川書店、一九七五年。
- ③ 五味文彦『平家物語、史と説話』平凡社、一九八七年。
- ④ 生形貴重『平家物語説話と語り』「文覚説話の文脈——延慶本『平家物語』における説話と物語——」有精堂、一九九四年。
- ⑤ 中村理絵「延慶本平家物語にみる『謀反人頼朝』から『將軍頼朝』への転換——第四『十七 文覚ヲ使ニテ義朝ノ首取寄事』を契機として」

『軍記物語の窓 第二集』、和泉書院、二〇〇二年。
 ⑥ 岩瀬博「平家物語の文覚説話」『軍記と語り物』一号、一九六四年二月。

⑦ 北原保雄・小川栄一編集『延慶本平家物語本文篇上・下』勉誠社、一九九〇年。以下、延慶本の引用は全て本書による。

⑧ 早川厚一「『延慶本平家物語』における頼朝の呼称について」『国文研究』六号、一九七八年二月。

⑨ 武久堅『平家物語の全体像』和泉書院、一九九六年。「高倉宮物語」の構造（七三頁～九七頁）「大臣殿物語」の主人公——宗盛伝承の様式と平家物語の構想」（一三四頁～一九三頁）。

⑩ 注①に同じ。

⑪ 富倉徳次郎『平家物語全注釈中巻』角川書店、一九六七年（七八頁）。

⑫ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語事典編集部編『日本国語大辞典第二版』小学館、二〇〇一年。

⑬ 佐伯真一「平家物語説話と語り」『勸進聖と説話——或は『説話』と『語り』』有精堂、一九九四年。

〔付記〕

なお、校正の段階で『平家物語』における人物呼称の研究として伊藤一重氏の論文がある（『平家物語』における人を示す表現について——覚一本・自称）『豊田工業高等専門学校研究紀要』第三十七号、二〇〇四年二月および『平家物語』における人を示す表現について——覚一本・対称』『日本語日本文学論集』笠間書院、二〇〇七年）があることに気付いたが、今回は論旨に反映させることが出来なかった。記して謝意を示したい。

資料1 覚一本の「地の文」における文覚呼称の用例

計	卷第十二				卷第五					
	六代被斬	泊瀬六代	六代	紺搔沙汰	福原院全宣	文覚被流	勸進帳	文覚荒行		
28	4	0	0	1	2	11	2	8	文覚	一義的呼称
18	2	2	12	1	1	0	0	0	聖	
2	0	0	0	1	0	0	0	1	高雄の文覚上人	
1	1	0	0	0	0	0	0	0	高雄の聖	
1	1	1	0	0	0	0	0	0	文覚房	
1	0	0	0	0	0	0	0	1	渡辺の遠藤左近将監茂遠が子	
1	0	0	0	0	0	0	0	1	遠藤武者盛遠	
1	0	0	0	0	0	0	0	1	やいばの験者	二義的呼称
1	0	0	0	0	0	0	1	0	天性不敵第一のあらひじり	
1	1	0	0	0	0	0	0	0	おそろしき聖	
55	8	3	12	3	3	11	3	12	計	

覚一本『平家物語』における文覚像

資料2 延慶本の「地の文」における文覚呼称の用例

計	第六末										第四	第二末							一義的呼称
	六代御前被誅給事	文学被流罪事付文学死去事隠岐事	肥後守貞能預観音利生事	六代御前高野へ詣給事	齋藤五長谷寺へ尋行事	六代御前大学寺へヲハスル事	六代御前被免給事	六代御前被召取事	文学ヲ便ニシテ義朝ノ首取寄事	文学上京シテ院宣申賜事	文学熊野那智ノ滝ニ被打事	文学兵衛佐二相奉事	文学伊豆国へ被配流事	文学院ノ御所ニテ事ニ合事	文学ガ道念ノ由緒事	兵衛佐頼朝発謀叛一ヲ由来事			
73	1	3	0	2	1	1	0	3	2(2)	3	20	8	15	9	2	1	文学(文覚)		
21	0	0	0	1	0	1	4(1)	13	1	0	0	0	0	0	0	0	聖(聖リ)		
21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	盛遠		
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	0	盛アマタ仏(ブ)		
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	男		
2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	文覚房		
2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	文覚上人		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	遠藤		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	遠藤武者盛遠入道		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	上人		
1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	文覚聖人		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	高雄文覚		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遠藤右近将監茂遠ガ子		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遠藤武者盛遠		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	渡辺ノ遠藤武者盛遠		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	腹巻ニ太刀脇ニハサミタル大童		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	持斎持律ノ行者		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	後代モ有ガタキホドノ木聖		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	天性ノ不当ノ者		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	物狂キ		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	長七尺計ナル大法師		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	スグレタル大力ノ心猛キ		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	サルイカメシキ者		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	身のホドアラハシタリシ者		
1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	怖シゲナル木聖		
1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	元ヨリ怖キ心シタル者		
143	1	6	0	4	1	2	5	17	7	3	20	8	17	13	34	5	計		

覚一本『平家物語』における文覚像

一義的呼称

二義的呼称